

# 胸を打たれた水路の開発

## 宍粟市波賀町

中国山地の麓にある私の集落は、田植えが早く毎年四月の終わりに、村の者が総出で井堰から田までの水路を「溝浚え」と呼んで、水路に落ちている枯葉や山の斜面から転んで入った小石・砂を取り除く大掃除をする。この作業の出役の連絡を受けると、田を耕作している者は、田地の大小にかかわらず一家の働き手が必ず出役する。欠席者は皆無である。

これは米づくりの生命である用水路が、どんなに大事なものであるかを皆が認識している結果である。

この習慣は、日本のすべての農村が仕事の表現の「ことば」は違っても、ずっと昔から受け継いでいる作業であろう。

私の村の水路は、一つの大きな山を超えて隣り村の谷川から、その山の中腹を掘り割って約一里（四キロメートル）の長さの水路を作り、田に水を引いている。

山には幾筋もの縦じわ（谷）があり、場所によっては岩石もある。その中をわずかな段差をつけながら掘り割りをするのだから至難の業である。

私の村はそこに、約五〇センチメートル、  
八〇センチメートルの幅で、約六〇センチ  
メートルの深さの水路を作っている。水路  
に入った水は、取り入れ口から田に至るま  
で、まるで流れているのか、いないかの様  
な  
勾配で音もなく静かに流れている。岩のある  
急流ではせせらぎの音も聞こえるが、全体  
としては、ゆっくりとした流れになっている。

この事は、急な流れを作れば昼夜をわかた  
ず流れる水の方で、水路の底を洗うのでそこ  
から水が漏れるからである。

今からもう三、四十年前になろうか、私は  
この作業に出役した。今はもう亡くなってお  
られる古老に、「この水路は、隣り村の谷川

から水を取り入れ、大きな山を超えての長い  
水路になっている。山はでこぼこだし、岩も  
ある。作業は大変であったらうと思うが、  
どのようなにして掘ったものか。」と尋ねたこ  
とがある。

そのおじいさんは、私の質問に腰に差して  
いるキセルを取り出し、大きく一服しながら  
つぎのように話してくれた。

「うん…。わしが若い時に聞いた話では、  
田に水を引くための水路が決まると、村の者  
が全員、日が暮れてから、決まった長さの竹  
の棒の先に提燈をくくりつけ、水路を引く山  
の斜面に立ったそうだな…。そしてその灯りを  
向かいの山から見、少しずつ段差をつける

ために。『何番上に』とか、『何番下に』とかの合図を送ったそうじゃ。

向かいの山は大きな川を隔てた隣り村で、遠いので、山の中に四、五人が待機して、伝令の役目をしたと聞いている。遠くからその光景を見ると、まるでキツネの嫁入りの行列のようで、提灯のほのかな明るさが山中腹に連なって美しかったらしい。

水路の場所が決まると、翌日は、朝から昨夜付けておいた目印を掘って行く。そんな日が毎日続いたそうじゃ。立派な道具もない昔のこと、それはそれは大変な苦勞だったようだよ。」と、話してくれた。

煙草（キセルで吸うきざみ煙草）がなくな

ると、煙草の火が消えない内に、左手の掌にポンと軽くキセルを吹いて落とし、火が残っている煙草を手の上で上手に転がし、次の新しい煙草にこの火を載せて、大きくうまそうに、煙草を吸いながら話を続けてもらったことを思い出す。

私の村だけでなく、山間地の私の町では、どの集落もこのようにして谷川の水を田に引いたものと思われる。さて、どんな方法で、今ある水路の多くが開発されたのか、私はまだ史実で調べたことがない。

どの村々にも、水路の開発には大変な苦勞があつたに違いない。